観光フォーラム

ライン川物語
―ツーリズム上、水運上の役割を中心に―

The Rhine River（Fluß der Rhein）:
touristic and navigable significations

大橋 昭一
Shoichi Ohashi
和歌山大学客員教授、名誉教授

Ⅰ．はじめに

ライン川は、ヨーロッパ西部を流れる大河である。特にドイツに深くかかわり、ドイツでは「父なる川」とよばれている。この川を象徴する「ローレライ（Loreley）」の歌は、ドイツでも日本でも広く知られている。ライン川連絡（遊覧）船がローレライのそばを通ると、船ではローレライの曲が流され、乗客はそれに合わせて大きな声で合唱する。

ちなみに日本では、岐阜県と愛知県との県境を流れる木曽川の中で、岐阜県美濃加茂市美濃太田地区から愛知県犬山市犬山城近辺までの有名な渓流部分は「日本ライン」という別称でよばれている。「日本アルプス」に倣ったものであるが、「ライン川」という名称の影響力の大きさを知ることができる。

Ⅱ．ライン川上流（部）

ライン川の源流は、スイス・アルプスの山中、トーマ湖にあり、最後はオランダのロッテルダム付近で北海に注ぐ。全延長は 1,233 キロメートル。トーマ湖を出た源流は、一旦、ドイツ・スイス国境のボーデン湖（Bodensee）に入り（ここまではライン川の「源流域」といわれる）、そこから出ていわば本流となるが、ここからバーゼル（Basel）までの、主としてスイス領を通る間は「高部ライン（High Rhine）」といわれる。

このボーデン湖からの区域、すなわち「高部ライン」区域でも、ウンター湖（Untersee）の一部になっている場所があることもあって、水量は実に豊富で、満々たる大河となっている。ライン川は、河口に至るまで、どこで見ても水量が多く、かつ流れが速いことが目を引くが、そうした中、この区域ですでにかなり大きな連絡（遊覧）船が運航されている。ただしこの間には、「ラインの滝（Rheinfall）」といわれる個所があり、この連絡（遊覧）船が行くのはそこまでである。

すなわち、この区域のライン川連絡（遊覧）船は、ボーデン湖のライン川入口にあるクロイツリンゲン（Kreuzlingen:スイス領）と、「ラインの滝」のすぐ上流にあるシャフハウゼン（Schaffhausen：スイス領）との間を往復するものである。シャフハウゼン→クロイツリンゲンの「上り便」と、クロイツリンゲン→シャフハウゼンの「下り便」とがある。

クロイツリンゲンは、ドイツ領コンスタンツ（Konstanz）のすぐ隣で、このライン川連絡（遊覧）船は上下便ともに途中でコンスタンツに寄港する。つまり、コンスタンツで乗下船が可能である。ちなみにコンスタンツは、この地域の実際的中心地であるが、飛行船の生みの親であるツェッペリン（Ferdinand Graf von Zeppelin）の出身地であることもあって、日本人でもなじみのある人が多い。コンスタンツの西方にある、ドイツ領内の有名な地域、シュヴァルツヴァルト（Schwarzwald）方面から列車でドイツ領内をコンスタンツに来ると、街の入り口にツェッペリンの像がみえる。

もとより、このライン川連絡（遊覧）船が寄港するのは、コンスタンツ寄港後は、主としてスイス領の諸港で、例えばその中には、「ラインの宝石」といわれるシュタイン・アム・ライン（Stein am Rhein）などの美しい街がある。

シュタイン・アム・ラインでびっくりさせられることは、中心街の建物の外壁にいろいろと大きなフレスコ画が描かれていることである。同様な絵はバーゼルなどスイス各地にもあるが、シュタイン・アム・ラインのものは、絵の数も多く、中には真に奇抜な絵もあり、実に特徴的である。このような絵を町の真ん中の建物に描き、広く見せるようにしているのは、何よりもそれがこの地区の有名な伝説的な逸話に基づくからであろう、ということは充分に理解できる。地方文化として尊敬されるべきものであることはいうまでもない。それにしても、びっくりさせられる。世界は広いことを実感させられる。シュタイン・アム・ラインには鉄道でも行くことができる。この鉄道はクロイツリンゲンからシャフハウゼンまで来て、さらにスイス領を遠方まで行く。

「ラインの滝」は、落差約 23 メートルで、高いというほどのものではないが、滝の横の長さは約 150 メートル。ダムのように横に長い滝であるが、大きな連絡（遊覧）船が通れるほどの大河の水が一気に流れ落ちる迫力には、すさまじいものが

ある。滝は、川の中の小島、というよりは小山で分かれている。その中の最も大きな島には、頂上に人間一人が立てるほどの空間がある。水量の多い時には、滝のすごい迫力で、この小島の頂上に立つには、少々勇気が要る。この小島には、どちらの川岸からも、滝壺遊覧用の小型船で行ける。

ライン川にあるこうした滝は、この「ラインの滝」だけである。昔は、ライン川を使って船で運ばれてきた荷物は、シャフハウゼンや近辺で、滝の下流点から上流点に積み換えられていた。シャフハウゼンは、かなり栄えた街であった。往時には、街を守る大砲を備えた要塞もあった。今もその跡を見ることができる。

シャフハウゼンの街はスイス領であるが、その駅には、例外的にドイツの鉄道もそのまま入線する。ドイツの列車で来ると、駅の中で国境を越えることになる。スイスの国境警備が厳しかった時には、この駅のドイツ列車用プラットホームにスイスへの入国審査を扱うコーナーがあった。このドイツの鉄道は、シャフハウゼンを過ぎると、再びドイツ領内に戻る。ライン川とほぼ平行して走り、バーゼルまで行く（ただし Basel Bad 駅まで。Basel 中央駅の隣の駅）。

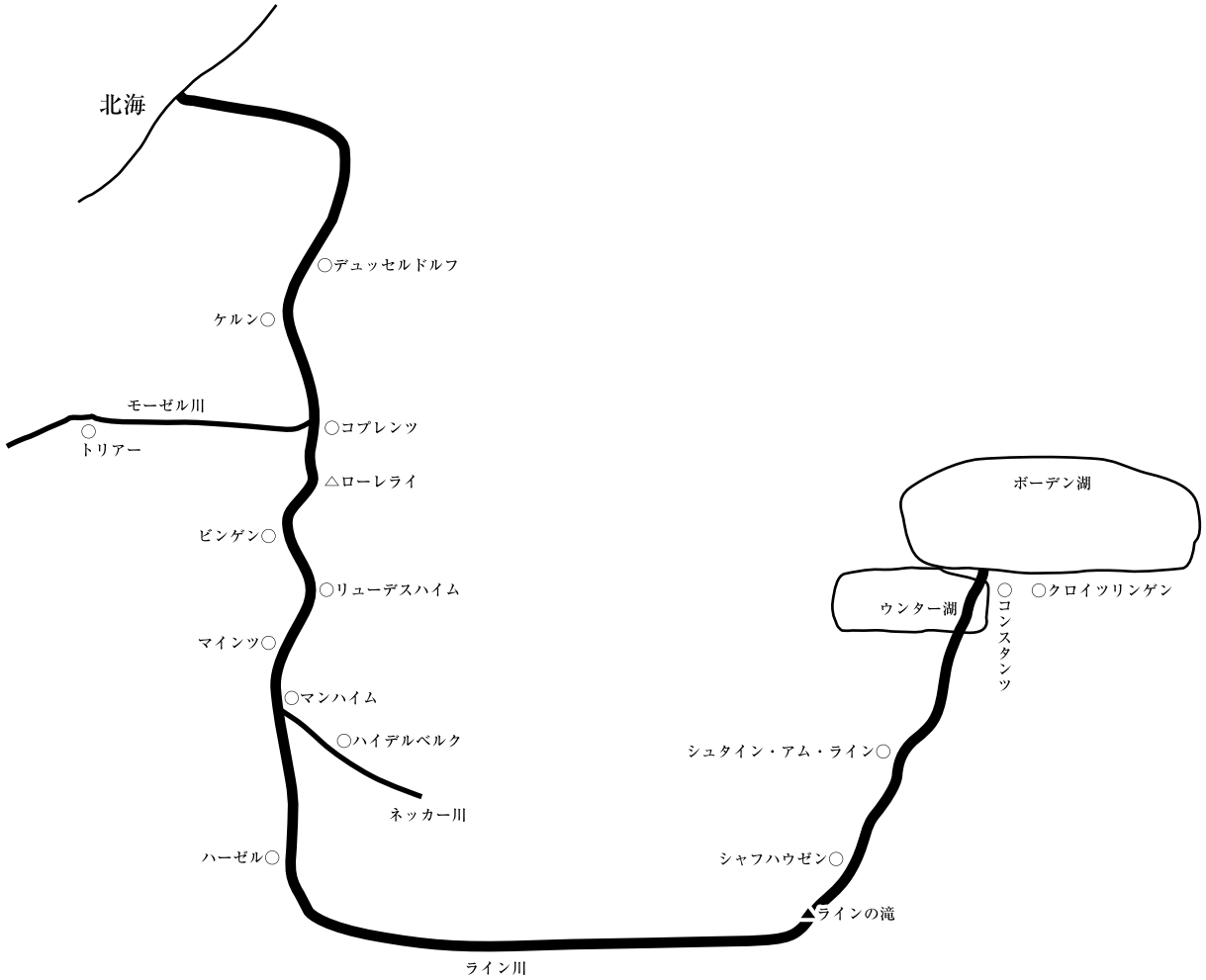
ライン川は、バーゼルまでの間に、例えばアーレ（Aare）川などいくつかの河川を併せ、バーゼルではさらに流量が多く、堂々たる大河となっている。バーゼルにはライン川を渡る橋がいくつかあるが、昔風の渡し舟も運営されている。そこでは、両岸間に太いワイヤロープが張られており、舟は、それに小さな滑車で結ばれたワイヤロープ支線で支えられて、進む。それほど水の流れは強い。これは以前に、日本のテレビ番組でも紹介されたことがある。

ちなみにバーゼルは、スイス・フランス・ドイツの3国国境が接している所で、鉄道の中央駅（Basel Central Station：Hauptbahnhof）では３国向けの列車プラットホームが別々になっている。ライン川岸では３国国境が１点で合い接している有名な個所がある。そこは小公園になっている。かなり途中まで市内電車で行ける。

ライン川は、バーゼルで「高部ライン」が終り、バーゼルから先は、次の節目である（ドイツ領の）マインツ（Mainz）まで「上流（部）ライン（Upper Rhine）」といわれる。この「上流（部）ライン」区間では、ドイツ領とフランス領との合い間を、国境となることもある形で流れる。この間には近郊にストラスブール（Strasbourg：フランス領）がある。

ストラスブールは、これまでに（戦争結果のいかんにより）ドイツ

ライン川主要部分略図



領になったり、フランス領になったりした所で、ドイツ領の場合には(ドイツ語で)“ストラスブルク(Straßburg)”といった。ストラスブール駅前にはかなり広い広場のあることが印象的であるが、市内にはEU議会、すなわち欧州議会の本会議場“Palais de lEurope”があるほか、高さ142メートルの尖塔がある古い大きな教会、カテドラル(Cathédrale)のあることでも有名である。(こうした教会の尖塔の多くは、かつては一般参詣客も登れる所が多かった。ただし階段のみで、エレベーターなどはなかった)

また、ドイツ領のマンハイム(Mannheim)では、ネッカー(Neckar)川と合流する。ネッカー川はハイデルベルク(Heidelberg)を通る(列車でハイデルベルクへ行くにはマンハイムで乗り換え)。ここは、日本でもよく知られているように、古城跡と古くからの大学の所在で有名である。そしてその先ネッカー川河畔には、ハイルブロン(Heilbronn)まででもいくつかの古城跡があり、古城街道(Die Burgenstraße)の中心部をなしている。

ライン川に戻ると、マインツから先は「中流(部)ライン(Middle Rhine)」といわれる。日本の観光関係でライン川といわれるものは、実際上、マインツから先のこの「中流(部)ライン」をいう場合が多い。

ちなみにマインツには、現代活版印刷機・技術を発明したグーテンベルク(Yohann Gutenberg)の博物館(Gutenberg-Museum)があり、その売店ではグーテンベルクが発明した当時の印刷機で刷られた聖書(グーテンベルク聖書)の1頁(コピー)を入手できた(現在も可能かどうかは問い合わせが必要)。

Ⅲ．ライン川中流(部)および下流(部)

この「中流(部)ライン」でも、中心になるのはビンゲン(Bingen)からコブレンツ(Koblenz)までのライン渓谷部分で、「ライン渓谷中流上部」として世界遺産になっている所である。ローレライがあるのも、この区間である。この区間では、ライン川の両岸には、山や丘が連なり、ライン川は美しい渓谷の間を流れる。水量の多いこと、流れの速さは変わらない。

山や丘にはいくつかの古城跡もあり、まさに「ライン・ロマンチック(The Romantic Rhine)」の極致である。連絡(遊覧)船で行けば、それをゆっくりと堪能できる。このライン川連絡(遊覧)船にも「上り」と「下り」がある。ライン川下流側、例えばコブレンツから上流に向けて行くものと、上流の、例えばマインツないしビンゲンから、下流の、コブレンツ方面に行くものとである。

さらにこの区間では、連絡(遊覧)船があるだけではなく、両岸にはライン川に平行して走る鉄道と道路がある。特に西岸(上流からみて左岸)の鉄道は、ドイツ鉄道網の中でも、フランクフルトとボン、ケルン、デュッセルドルフなどザール地域を結ぶ基幹中の基幹といっていい区間で、特急列車はじめ多くの列車が走る。ドイツを代表するライン川の景観を車窓からも充分に観ることができる。時間的にいえば、マインツからコブレンツまで、連絡(遊覧)船では5時間ぐらいかかるが、特急列車では50分ほどである。ローレライ伝説のある所も、当該地のライン河東側岸壁にその旨が大書してあるから、少なくとも西岸を走る多くの列車では車窓から充分に見ることができる。

それでもライン川では、やはり一度は船に乗ってみないと話にならないというのが、多くの人、特に観光客の実感であろう。このライン川連絡(遊覧)船の場合、前記のクロイツリンゲンからシャフハウゼンの場合も同様であるが、路線バス的な沿岸交通機関という意味もあり、途中にいくつかの停留所的な寄港地がある。そこに接岸し、乗降客の扱いをする。

従って遊覧客でも、始発港から終着港まで乗り続ける必要はなく、途中の寄港地で乗降できる。船の発着時間は、途中寄港地のそれを含めて、時刻表的に予告されており、遊覧客もそれに従って乗降し、切符も乗船区間分のみのものを買えばいい。

ツアー旅行グループなどでは、「ライン川遊覧船に乗船」といってもこうした一部区間だけの乗船というものが結構ある。ツアー時間の関係で、乗船時間が長く取れないのである。当該旅行グループ用のバスが陸路を先回りして、ツアー客の下船場所で待機している。

そうした中間乗降地で特に有名な所に、リューデスハイム(Rüdesheim:ライン川東岸)がある。ここでは連絡船用桟橋のすぐ前に多くの土産物店やレストランが集まっている。それだけではなく、商店街の奥に、近くのニーダーワルト(Niederwald)に行くリフトがあって、途中下船には好適な所である。

ニーダーワルト行きのこのリフトは、ワイン用ブドウ畑の上を通り、頂上まで行くが、そこには、1871年の統一ドイツ帝国建国を記念して、1883年に建立された大きなゲルマニア女神像を中心にした広場があり、ライン川の展望台もある。

この広場から山上の森の中を北方向(ライン川川下方向)に向かって散策路がある。それを30分ほど歩くと、別のリフトの乗降場(山上終点)がある。それに乗って山麓終点で降りると、その街はアスマンスハウゼン(Assmannshausen)といって、小さな街ではあるが、美しいドイツ的な木組みの家がいくつもある所である。ゲーテなども来遊したことがあるといわれる。鉄道(ライン東岸の線)の駅もあり、ライン川連絡(遊覧)船の寄港地でもある。

ところで、このライン川中流部分連絡(遊覧)船にしても、上流のクロイツリンゲン～シャフハウゼン間の(上流部分)連絡(遊覧)船にしても、日本人には少々違和感をおぼえることがある。それは、これら連絡(遊覧)船の中には、中心的な室内顧客席である1階の室内席が、すべて「レストラン席」とされている場合があることである。何か注文しないとその席にはおれない。こうした船内レストランに入らない客は、屋上デッキなど屋外のベンチを使用する。座る所は充分ある。

これら連絡(遊覧)船は、前記のように、沿岸地域の路線バス的な交通機関という意味もあるから、地元の人が所用で乗船してくる。そうした人の中には「1階レストラン席」に着席し、例えばコーヒーを1杯だけ注文して、下船する寸前まで

飲まずにいる人がある。「これぞドイツ人」と感嘆させられる。

ここで、ビンゲンからコブレンツまでのライン川渓谷美のなかで、次の2点だけについて旅行ガイド的な案内をしておきたい。

第1は、上流のマインツ、ビンゲンからライン川を下降して、いよいよ「ライン川の渓谷美」が始まる所にある、プファルツ城（Burg Pfalzgrafenstein）についてである。この城は、上流からの場合、ライン川渓谷のいわば入口にあり、しかもライン川の真ん中、中洲の上にある。城自体は小さいが、何よりも形状や彩色がとても異色で美しい。実に目を引く。お伽の国の城といった感じである。「ライン・ロマンチック」の象徴といってもいい。両岸の列車の車窓からもよく見える。ライン川渓谷に初めて来て、これを最初に観る人は、「さすが天下に名高い“ライン川”。こんな城があるのか」と感嘆する。

この城は、もともとはライン川通行の船から通行税を徴集するために作られたもので、見学ができる。この城のある中洲のすぐそばに、ライン川の両岸を結ぶフェリー船があり、この城見学希望の客があると、この中洲に着岸してくれるのである。行く場合は、両岸を走っている列車で近くの駅まで行き、フェリー船乗り場まで行って、フェリー船の船員に「プファルツ城に行きたい」といって、所定の切符（往復切符）を買う。

城内には、往時の大砲があり、捕縛した人に用いる手錠や足枷の展示もあって、やはり城であることを認識させられる。帰途の便については、プファルツ城入口の受付に、中洲に着岸する（予め決まっている）フェリー便の時刻表が貼ってあるから、それに合わせてフェリー着岸点で待っていると、フェリーが来る。

第2は、コブレンツの近くにあるマルクスブルク（Marksburg）城についてである。これは現存する中世の古城の中でも保存状態が良く、付近の城の中では最も美しいといわれている。その塔などはライン川連絡（遊覧）船からよく見える。ここへ行くには、ライン川連絡（遊覧）船ではブラウバッハ（Braubach）で降りる。列車の場合は、コブレンツ駅でライン川東岸の列車（この線は基幹線的な西岸の線にくらべローカル線的）に乗り（乗り換え）、ブラウバッハ駅で降りる。

そこは、ドイツ的な木組みの家がある小さな街である。マルクスブルク城はすぐ背後の山の上にある。ブラウバッハから城まで直接の登城（登山）路があるとのことであるが、ブラウバッハの街の中心部からは、マルクスブルク城の城内広場まで遠廻りで広い通常の道を行く、（ヨーロッパ各地でよく見かける）トレイン型バスがでている。切符はその場でバスの運転者から買う。

一方、コブレンツで否が応でも目につくものに、ライン川の向かう岸にある巨大な台形的な丘の上にたつ城塞的建築物がある。これはエーレンブライトシュタイン城塞（Ehrenbreitstein Festung）があった所で、近世では城（Burg）というよりは城塞もしくは要塞というべきものであった。コブレンツ市内からは、ドイチェスエック（Deutsches Eck:ドイツ岬:ライン川とモーゼル川との合流点）の付近からロープウェイがあり、ライン川越しに簡単に行くことができる。

ここが城郭的なものとして使用されたのは、歴史的にかなり以前からであるが、近世ではプロイセン王国領となり、1800年代に近代的な城塞として完成された。この城塞は先の大戦で空襲など戦火は一切受けなかったといわれる。今も残る屹立する内部の，観る人を圧倒してやまない、煉瓦作りのかなり高い城壁などを見ていると、往時のプロイセン（プロシア）、すなわちドイツの軍隊の、軍隊生活の一端を偲ぶことができる。ここの展望台からは、ドイチェスエックなどコブレンツ一帯が一望できる。なおこの城塞跡の一部は、ユースホステルになっている。

コブレンツのドイチェスエックでライン川と合流するモーゼル川を遡ると（モーゼル川沿いに鉄道があり、列車で約90分）、隣国ルクセンブルクへの入り口にあたる所にトリアー（Trier）がある。ここはドイツ最古の都市で、ローマ時代の遺跡がいくつも残っている。まず目に付く圧巻は、旧市街入口にある黒い石の大門、トリアーのシンボルといわれるポルタ・ニグラ（Porta Nigra）で、門内に入って階段を登ってみると本当にローマ時代に帰ったような気分になる。また市の中心部にはカール・マルクスの生家（Karl Marx Haus）がある事でも有名である。

ライン川に戻ると、コブレンツからの先は、ライン川は「下流（部）ライン（Lower Rhine）」といわれ、平野の中を滔々と流れる。とにかく水量が多く、流れは、思ったより早い。その一端は、例えばケルンでは、ケルン（鉄道）中央駅、従ってそのそばにある、高さ157メートルの尖塔で有名なケルン大聖堂のごく近くで見ることができる。ライン川中流部連絡（遊覧）船にはケルン発着のものもある。

ケルン中央駅すぐ近くに、ライン川に架かる長い橋がある。ホーエンツォレルン橋というが、この橋には、鉄道用部分のすぐ横に人道用部分があり、人間や自転車が通れるようになっている。この人道部分には「愛の南京錠（love padlocks）」といわれる部分がある。そこには永遠の愛を誓ったカップルが、二人の言葉等を書いた南京錠を掛ける棒がある。多くの南京錠が掛けられている。ここに錠をかけたカップルは、その場でその合鍵をライン川に投入する習わしであったといわれる（現在は河川浄化のため推奨されない）。

Ⅳ．ライン川をめぐる水路網

ライン川の雄大さは、ケルンのすぐ下流のデュッセルドルフでも見ることができる。デュッセルドルフは日本企業の支店や出張所が多くあり、日本人スタッフのいる美容室などもあって、日本人にはなじみの深い「日本企業のヨーロッパ基地」として知られた所である。

こうした中、ライン川は水運に実に広く利用されている。経済高揚の時期には、ライン川渓谷部分でも、行き交う船で一杯であった。これは、かなりの程度ライン川が、他の河川とも広く直結した水路網のもとにあることに基づく。

一方ではライン川は、今日では、ヨーロッパの今1つの大河であるドナウ川と水路上直結したものとなっている。この水路は、ライン川からすると、次のようにできている。

ライン川は、まずマインツでマイン川と合流する。このマイン川を遡ると、フランクフルトを通り、さらにその上流バンベルクで、「マイン･ドナウ運河（Main-Donau-Kanal）」に結ばれている。この「マイン・ドナウ運河」を南下すると、レーゲンスブルク近郊のケールハイムでドナウ川と合流する。この「マイン・ドナウ運河」は 1992 年に完成したものである。これによりライン川とドナウ川とはつながったものとなった。2つの大河、従ってライン川の河口である北海と、ドナウ川の河口である黒海とは、水路上一体のものとなっている。

他方、ドイツとフランスとの関連についてみると、ライン川は水路上でパリと直結している。すなわちライン川は、バーゼルの少し北側（川下部分）において、フランスとつながった「マルヌ・ライン運河（le Canal de la Marne au Rhin）」と接続している。この運河はマルヌ川と通じて、パリのあるセーヌ川に続いている。ライン川からの船は、パリに直接来ることができ、さらにセーヌ川の河口であるイギリス海峡にも行くことができる。この「マルヌ・ライン運河」は 1853 年に開通したものである。

Ⅴ．おわりに

このように西ヨーロッパは、ライン川を含めて、水路上でも一体のものとなっている。このため、こうした河川を利用した、例えばヨーロッパ大陸クルーズ船ツーリズムが盛んで、ライン川などでも大きなクルーズ船が往き来している。水位の違いは閘門で調節されている。閘門は随所にある。パリ市内にもある（例えばパリ東駅近く、サン・マルタン運河入口）。こうした水路上の連携は、西ヨーロッパ統合を実体あるものとする物的基盤の１つである。今１つの有力な基盤は道路・鉄道の連携である。鉄道では西ヨーロッパでは複数国をまたぐ国際列車がいくつも走っている（この点については、大橋, 2020 を参照されたい）。

そうした点からみると、イギリスは、英仏海峡トンネルができたとはいえ、やはり島国的制約があり、こうした物的基盤、すなわちインフラについてヨーロッパ大陸諸国との統合性が薄いようにみられる。ここにイギリスにおいて、近年においても EU 離脱の決定となった１因があるように思われる。

（付記）：以上本稿の記述には、本稿筆者が 1992 年約 6 か月間調査研究のために西欧に滞在した際の実情やデータに基づくものを多く含んでいる。現在の状況についてはインターネット等で確認されたい。

（参照文献）

内田日出海（2014）「マルヌ・ライン運河に関する経済史的考察」『成蹊大学経済学部論集』45 巻 1 号、71-87 頁

Free Encyclopedia Wikipedia, retrieved February 14, 2017；“Rhine“, from: https://en.wikipedia.org.wiki/Rhine；do., “Main-Donau-Kanal”, from:https://de.wikipedia.org.wiki/Main-Donau-Kanal

大橋昭一（2020）「西ヨーロッパのツーリズム事情：基礎的な事柄」『和歌山大学・観光学』22 号（観光フォーラム）、109-114 頁

受理日　2022 年 11 月 29 日